# 祥語録｜ベッド・サイドの名文句

男のセックスは、与えるまでが生命であり、
女のセックスは与えられるところから生命が始まる。

女性の体が欲しいという望みなしに、
男が女性と交際しようなどと思うことは、
太陽が西から上ることがないと同じくらいに、
あり得ないことなのである。

男女とは、まずセックスによって近づけられ、
愛情によって離れがたくされ、
そして愛によって、
ほんとうに結ばれてゆくものである。

「できすぎた精子を、止むなく体外に捨てるという廃物利用で、
男というものは
性的快感を自然に覚えてしまうもの」
なのである。

性とは、
下半身の局所にぶらさがっている、
なにやらうすぎたない附属物なのではなく、
人間が生きている中心で、
生まれてから死ぬまで燃え続けるエネルギーにほかならない。

男の性が撞木だとすれば、女性の性は釣鐘みたいなもの。
撞木が当らない限り、釣鐘は鳴らないけれど、しかし鐘が鳴って、
余韻を残してなお鳴り響いている時、もう撞木はさっさと鐘から離れて、
まるで無関係のような顔をしている。

生の充実なしに、性の充実はないし、性の充実なしに、生の充実はない。

われわれは標準人間ではなく、正常人間であればいいのであり、
標準ペニスではなく、正常ペニスの持ち主であれば、それでいいのである。

もし彼が、この激動のこんにちに生きる男であるか、
結納の目録なんてものに関心を持たない男であるか、
三宝の上に、婦人の体温計を一本のせて、
彼女に贈るくらいの芸当をやってのけるだろう。

夫婦の間では、どんなに大胆なエロチシズムの行使も、決して不道徳とはいわれないものだ。

明日の生命知れないわれわれが、
なんで半年もさきの、彼女の卵がいつ出るか
などということがわかるものか。

避妊は、やらないよりは、やるほうがめんどうであるに決まっている。
でもセックスにおける頂点の喜びというのは、
大脳的、あるいは全人間的なものであって、けっして局所的なものではない。
避妊をしたからといって、性の喜びの生理的絶対値に変わりはない。

男のセックスはレディメード（既一的）、
女のセックスはオーダーメイド（個一的）、
出来あがりは男という裁断師の腕次第。

性交とは、
これ以上ない、二人の許し合いの姿であり、
これ以上かくすことのできないさらけ合いの姿である。

セックスがあればこそ、愛が育ち、
愛があればこそ、セックスは美しいものとしての意味を持つようになるのである。
だから“愛があれば、性なんかいらない”といういい方はまちがいである。

結婚とはエロチシズムの、実用化と高度化の場である。

性は、魔術的万能強力接着剤ではない。
性は男女を近づけることまではやるけれど、しかし、
二人をそのまま保っておく力はない。

前戯は、人間だけに許された、いかにも人間らしい性生活の部分である。
愛のささやき、愛の対話、ややエロティックで気のきいた冗談、
そして音楽、接吻、乳房その他に加えられる愛撫、の総和によって
織りなされるという部分は、たしかに他の動物にはみられない、
人間特有の部分である。

20歳代は量で勝負をし、
30歳代では質で勝負をし、
40歳代では間隔で勝負する。

どのみち、結婚して夫婦になれば、
性の交わりを持って生きるわけなのであるから、
性欲へのブレーキの踏み方や、道徳という交通法規ばかりありがたがらないで、
エロチシズムというアクセルの踏み方も上手にならなければ、
性は、うまく動かないのは、理の当然というものである。

奈良林祥著『なんの本だろう』（KKベストセラーズ）より